

川はいまも流れる

大 原 富枝

川はいまも流れる

© 大原富枝 一九六二

昭和三十七年十月二十日 第一刷發行

二九〇圓

著 者 大 原 富 枝
おおはら とみえ

發行者 野 間 省 一
東京都文京區音羽町三ノ一九

印刷所 豐國印刷株式會社

(製本大進堂)

發行所

株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽町三ノ一九
振替 東京 三九三〇
電話大塚(九四二)大代表三二二一

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

川はいまも流れる

裝
幀
朝
倉
攝

一

祖父は明けがたに死んだ。

痰がからむようにのがごろごろと鳴つて、それが止むとせわしく息を吐きはじめ、吸う息はなく、最後にはなまあくびのようなものを洩らして、静かになった。

慧子^{さとし}は周りの人たちとおなじにじいつとそれを見つめていた。顔色も眼の色も平靜であつたけれど、からだの芯の方で衝撃を受けていた。——終つた！ 終つてしまった、と思つた。祖父のいのちがというのではない。自分のなかで、なにかが終つた！ と思つたのだ。茫然と坐つていた。

ほんの一瞬のことだが、周りの人たちが消えて、祖父と二人だけのように感じて坐つて

いた。しいんと静かであつた。

叔母の夫の下篠鐵意が口の中できかへるやうにつぶやきながら、落ちてゐる祖父の下顎を持ちあげて合せようとしていた。死者への敬虔な態度というよりも、壊れた甕を接着劑でくつつけているひとの慎重さに見える。うまく合わさつた顎を、そうつと手を引いて彼は満足げに眺めた。

そんな叔父や、念佛らしいものを唱えている女たちの姿や聲が、ガラス戸をへだてたやうに慧子には感じられた。

「英邑に知らせにやアなるまいのう、だれぞ電報を打ちにいかそうか？」

叔父は人々を見廻していつた。

「そう、そりやア勿論、知らせてやらにやアいかん——」

夫の寛道がそう答えるのを、そして自分の方をちらつと見るのを、慧子はやはりガラス戸越しのように眼の隅に入れていた。そつちは見ないで叔父に背いて見せた。

——あのひとは、またわたしの顔を見る！　ひとに返事をするときに……

夫のその癖が——というよりも、そういうときの夫の眼の表情が彼女は好きになれなか

つた。

頭の後の方がへんに軽いような空っぽな感じがあつた。ここで倒れてしまつてはみつともない、と慧子は思つた。貧血はずつと前から持病のようになってゐる。

「ちよつと、失禮して……」

慧子はつぶやきながらふらつと立上つた。みんなが自分を見るのがわかつた。

「あたまで……」

やはりボソツといつて、慧子は部屋をでた。寛道がついてきて、

「眩いがるのか——」

と訊いた。

もう馴れていて、返事は期待していない口調であつた。

「鍵をとつて——」

慧子は手を伸べていつた。寛道は廊下の途中から廣い土間に下りてゆき、大人の手ほどもある大きな土蔵の鍵をとつてきて渡した。慧子が鍵をほしいというのは土蔵の二階に一人でいたいということで、寛道にとつては遮斷機のようなものだつた。そこから先へは彼

は立入るわけにはゆかない。——そんなふうになつてしまつていた。

長い廊下の突きあたりから丸い飛石を四つ五つ渡つて、慧子は土蔵の重い大戸を開いた。穀物と藁と、そして日光の通らない空氣のまじりあつた臭いが、彼女の頬に微かに搖れた。急な狭い階段を上つてゆくと、天井の低い二階の小窓の厚い扉を引きあけた。金網ごしに葉末が褐色にすがれはじめている葦と、矢竹の藪が見える。眼の位置をかえるにつれて、石のごろごろした白い川原と浅い水際が目にはいる。窓ぎわに置いてある木製のベッドに腰かけて、慧子はじいつとしていた。

川原はいま夜が明け放れたところであつた。窓の眞下には削ぎ下したような斷崖がまだ枯れない草に覆われていて、その向うに碧い淵が、さらにその水が大きな石や岩に白い飛沫になつて流れる淺瀬とが、うすれはじめた川霧の底にある。

階下で大戸の開く音がした。階段のきしむ音がして、寛道の頭が、それから胸まで現れた。

「——どうしたの」

いつもは決してあがつてきたことのない夫が、ここまでやつてきたことに慧子はおどろいて訊いた。

「いや、どうもせんけど……」

寛道はどことなくふだんとちがつたものを顔にも、體ぜんたいにも漂わせていた。彼はぼつさりと慧子の前に立つていた。

「祖父さんが死んだ思うたら……お前の傍にいたい氣がした——」

思いがけないことを聞いて、慧子はまじまじと夫の顔を見た。この一年間、他人になつてしまつて、話すことといつたら是非必要な暮しむきのことばかり、心に觸れあうような會話を交したこともなかつた。

「そう？ お祖父が死んで、なにかもう終つてしまつた氣がするの、なにかわからんけど……」

「うむ……」

寛道は肯いて突立つていた。

「妙な氣がするのよ、あたし。——自分もいつしよに死んでももうた氣がする」

「うむ——」

慧子はうつむいて、顎を衿の中へうめるようにしながら、

「反對かしらん——いま生き返つたのかしらん……」

寛道はこんどはうむ、ともいわず突立つていた。

「子供らアに曾祖父さんにお別れさすの、出来るだけ短かい間にしてね、——あんな年ごろに、死んだ人間を見るの、ショックでしょ」

「うん、そうする——」

寛道は、頭のなかにもやもやとしているものが、まだ一つの形になりきらない、といったふうな、漠とした顔をしていた。何かを妻にいいたくて、ふだんの習慣を破つてこころまであがつてきたけれど、話すべきことがはつきりした形にまとまらない、というふうに。

慧子にはそんな彼の氣持がわからないわけではなかった。九十に近い年寄りではあつたし、もう長く寝ついていたのだから、祖父の死ぬことは勿論誰にもわかつていた。しかし、ほんとうに死んでしまったとき、寛道の氣持の複雑さが慧子にも推察できる。それは倉石曉太という、若い日に自分が愛した男と關わりがあるのだ。祖父はいつも曉太との關わりで慧子に感じられていた。寛道にもいまはそれがわかつている。

寛道は結局、諦めたように階段の方へ歩きながら、

「あつちをあげるわけにいかんけに、わしは下りる。大丈夫か——」

「大丈夫、あつち、お頼みます」

——眼の周りを黒ずませた疲れた顔で、慧子はぼんやり坐っていた。心が薄い膜のようにふるふると慄えて泣いていた。

この二階の隅には、角々に金具を打った古い漆塗りの大きな文庫があつた。祖母が嫁入りのとき、學問好きだつた父親から物語本など入れて持たされてきたものである。いまは慧子のものになっていて、彼女の古い手紙類がはいっている。慧子はその蓋をあけて眺めていた。ピンクや水色や黒のリボンに分けて束ねられているそれらの手紙は、みんな倉石曉太からの手紙で、古いものは二十年あまりにもなる。

肉太の萬年筆の強い手蹟が、インキの色も黒ずんでいた。大學ノートや文房堂製とセビヤで小さい文字のはいつている上質の原稿用紙を利用した手製の封筒が多く、ごく稀に白の角封筒がもうすつかり黄ばみ、褐色になつたりしてまじっている。

寛道と結婚して以來、慧子はそれを見ることはしなくなっていたが、曉太の死んだ前後、正確にいえば彼の還るのを待つていたころ、また彼がもう還つてはこないのだ、と諦

らめなければならなかつたころ、頻繁に毎日のように彼女はそれらを讀み返した。いまでも封筒を見れば大體いつごろのものがわかるし、それぞれの封筒はその内容を暗示する表情を持つようになってゐる。

——暑い日であつた。バスは川に添つた山裾の屈曲の多い白い街道を、ひっきりなしに警笛をならしながら、砂埃りをあげて走つてゐた。城下街からもう數十キロも山麓の村や町を縫いながら、乗客を降ろしたり乗せたりして走りつづけてきたので、埃にまみれたバスはくたびれたようにのろろ走つてゆく。カーヴが多いので這うようなスピードでしか走れない。

——あ、一本松がやつと見えだした、と慧子は思つた。そこからは一つだけ山裾を大きく迂回すれば、彼女の村である。しかしそこへゆきつくまでがまだなかなかだ。一本松はカーヴを廻るたびに見えたり隠れたりしていたが、ある一つの曲り角を廻つたとき、突然目の前に現れた。

そのとき、一本松の大きく傘のように擴がつた枝の下から、栗毛の馬がゆつくりと歩き

だしてバスに立ちふさがるように静かに立つた。馬の眼は静かでバスを恐れてはいなかった。それは曉太の愛馬の太郎であつた。このあたりの男は子供のときからよく馬にのる。

太郎の眼は大きくて柔和で、そのときはまたまるで運命のように冴え冴えとしていた。

彼は十分主人の意志を理解しているようにおとなしかった。町から通つてゐるバスの若い運転手が不審そうに窓から首をのぞかせたとき、曉太が太郎から下りて、「すみません、ちよつと……」と會釋しながら、慧子ともう二人老人の乗客の残つてゐるバスの中を覗きこむのを、彼女は見た。

「慧子ちゃん、ちよつと降りてくれ、用がある——」

曉太は、まつすぐに彼女を見ていつた。なんとなく嚴肅な氣配を慧子は感じた。彼女は眼を丸くして曉太を見た。いままで彼と話したことも、口をきいたこともないのに、いきなりどうしたんだらう、と思つた。

あんまり唐突でそして意外な出來事であるために、却つて抗うわけにはゆかない重大な意味があるように思われた。——お祖父さんが突然倒れたのかしらん？ それにしても曉太さんが迎えにくるのはおかしい……

暁太の強いまなざしは慧子を見据えるように見つめていた。慧子はその眼と見つめあつたまま、黙つてじりじりと腰をあげ、小型のトランクを抱えてバスを下りた。

「トランクをこつちへよこしや——」

暁太は慧子の荷物を全部持つと、一本松の下に太郎をひいていつた。そこは道幅が倍ほど廣くなり、石地藏が三體据えてあつた。松は大人の兩腕にも抱えきれないほどの太さで、川になだれ落ちる絶壁の上に枝を伸していた。ひろがつた枝は半分は碧い淵の上に覆うように張り出して茂り、水面と枝との間は數十米も離れていた。

「——びっくりしたか！」

暁太は慧子の驚愕おどろきを和めるようにいつた。彼はぎごちなく微笑した。白い大きな前齒が見えた。慧子は彼がひどく緊張していることにはじめて氣がついた。自分が怯えた、困惑した顔をしているにちがいないと思つた。慧子は顎を胸につけるようにして上眼づかいに彼を見、黙つて肯いた。

暁太は崖つぶちに突立つて下を覗いていた。白いシャツの背中が川から吹きあげる風に丸くふくらんだ。慧子も並んで矢竹の茂つた崖の下の水面を覗きこんだ。

碧々とした水面に、流木の大丸太が二本、斜めに突き刺さっている。その流木はずっと以前、彼女がまだ幼女のころからそこに突き刺さつて斜めに空の方を指していた。

ある大水のとき、それは上流の貯木場から流れてきて、この淵の複雑な渦の勢に吞まれ、水底の岩石と岩石の間に一方の端を食いこまれて突立つたのであらう。そしてその後のいかなる出水にも、どうしてもそこから脱けることができないのだ。恐らくそれは、水底の岩石に食いこまれた部分が朽ち腐れて折れるまで、そうやつて斜めに天の一方を指して突立つているより仕方がないのだらう。

こんなにも長い年月、同じ姿勢を保ちつづけているところを見ると、この大丸太はよく肥えた脂の多い松にちがいない。松丸太は水中にある場合は全く腐るのを忘れてしまうのかと思うほど、長く持つものだ、と彼女の家にいるおさわがよくいつていた。

曉太はそれを見下して立つている。慧子はそつと窺うように曉太の横顔を見た。——この一本松の淵の異様な風景を見ることを、幼いときからずうつと、いまでも彼女はなにか恐ろしいものに思っている。この流木の姿を心の無い木材だとは、とても眺められなかったのである。なにか呪縛されている魂の象徴のように見えて、恐ろしくてならなかったの

だ。そこで一人の女が死んだという事実があるからであつた。

その水底は岩石が複雑に入り組んでいて、老練な川漁師でもその淵にだけは潜らない。その水底の岩のはざまに一人の女が横たわつていて、その髪は長々と解け流れ、白く晒された手がその流木の端をしつかりと掴み、支えているのだと、そういう圖が少女の慧子の頭の中に描かれ、消えなくなつていた。

「僕の母は、死體になつてここに浮いた。知つてるだろう？」

曉太がいつた。慧子は彼の顔を見ないまま黙つて肯いた。

「僕は八つだつた。そのときの記憶はある。——おやじが殺したという評判のあつたことも知つてるだろう？」

慧子は恐れるようにそつと眼をあげて曉太の顔を見つめながら肯き、そのあとも見つめつづけた。

「殺したかどうかは知らんが、そのときはよく憶えているんだ——」

——そのころ、村にはまだ電燈がついていなかった。母がカンテラを持つて彼の枕もとを通つた。あかい、怒つた顔をしていた、と思う。父と母はその前夜、猛烈な諍いをし